

資料：

発達障害支援の質向上を目指した専門家養成における大学の社会的役割 —川崎医療福祉大学TEACCH Autism Programの取組から学ぶ—

藤田久美
山口県立大学社会福祉学部

FUJITA Kumi

The social role of universities in training professionals to improve the quality of support for developmental disabilities —Learn from the activities of Kawasaki University of Health and Welfare TEACCH Autism Program—

1 はじめに—自閉症の子どもとの出会いから—

今から27年前に、小学校教員として自閉症の子ども
の支援にかかわった経験がある。重度の知的障害
を併せもつ自閉症の男の子で、家族でさえも彼を理
解することに戸惑っていた。小学校1年生だった彼
は、話し言葉を持たず、多動で、少しも目を離すこ
とができない。予定の変更が苦手で、しばしばパ
ニックを起こしていた。母親は苦悩や葛藤を抱えな
がらも必死に子どもを育て、教員である私たちに
様々な思いや要望を伝えてくれた。私は、その思い
を受け止め、力になろうとして日々奮闘するもの
の、そう簡単にはいかなかった。何とか彼との信頼
関係を構築し、教師として様々なことを教え、コ
ミュニケーションをとっていきたいという想いば
かりが先走り、何をやってもうまくいかなかった。
なぜならば、私には、自閉症の子どもを支援でき
る専門的な知識と技術がなかったからだ。特別支
援学級（当時：特殊学級）の主任教員だった角中裕
子教諭（現：発達相談室アズ）は、彼を支援するた
めには「自閉症」を学ぶこと、そして自閉症である
彼を正しく理解した上で、教育内容・方法を考
えていく重要性を私に教えてくれた。子どものた
めには何が出来るかを常に考えていた角中氏は、
自閉症支援に関する専門的な学びを求め、行動す
る人だった。そのおかげで、私もいろいろな場
に出向くことができた。山口大学障害児教育研
究室の運営で実施されていた山口県自閉症研究
協議会主催の勉強会や山口県自閉症協会（現：
NPO法人山口県自閉症協会）主催の

研修会では、支援者の実践報告と交流の場が設け
られ、年1回、国内から著名な講師を招き、講演
会が開催されていた。これらの学びの過程で、米
国ノースカロライナ大学で開発されたTEACCHに
出会った。そのTEACCHを日本に取り入れられた
児童精神科医の故・佐々木正美氏の講演の内容に衝
撃を受けた。「自閉症の子どもを正しく理解する
こと」「正しく理解しないと支援はできない」「私
たちは彼らから学ばなければいけない」「TEACCH
を学ぶことの大切さ」等、すべてのメッセージが
自閉症支援に携わる人（私たち）の胸を揺り動
かした。

2 TEACCHとの出会いから

未熟な教員だった私に学ぶ機会を与えてくれた
自閉症の彼との出会いは、その後、たくさんの自
閉症の子どもと家族の出会いへとつなげてくれた。
平成11年にクリニックで自閉症と診断されたばかり
の幼児の療育と母親支援の臨床に携わる機会を
いただくことができた。クリニックの院長から
わたされた書籍「Teaching Activities for Autistic
Children 自閉症児の発達単元267個別指導のアイ
デアと方法」（ショプラーE・/M・ランシング/L・
ウォーターズ編著、佐々木正美/青山均官監訳、
1988年岩崎学術出版社）は、米国ノースカロ
ライナ大学TEACCH部のスタッフによる執筆で
あり、監訳者には、故・佐々木正美氏の名前が
書かれていた。私はこの書籍を教科書に、子
どもたちの課題の準備や発達支援の方法を学
んだ。クリニックで子どもと家

族の支援に携わる中でTEACCHについてもっと学んでいく必要性を感じていたが、身近な地域で学ぶ場はほとんどなく、県外で実施されていた講演会、研修会、セミナーにでかけた。

3 TEACCHについて

TEACCHは、故エリック・ショプラー (Eric Shopler) 博士によって1960年代に開始された研究をもとに、1972年に州法に定められ、その後は第2代部長であるゲーリー・メジボフ (Gary Mesibov) 博士のリーダーシップの下、実践的に発展し続けている。当時、TEACCHは、「Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped Children」の頭文字をとったものとされ、単なる支援方法ではなく、自閉症児・者を対象とした生涯にわたる包括的な支援プログラムとして実施していた。特徴として、親と支援者の共同によるプログラムが進められ、支援者が家族と共に本人の理解と支援の方法を探求することの大切さを提唱していることである。TEACCHでは、自閉症の診断・評価、家族への情報提供、さらに本人の成長に伴い学校や地域へのコンサルテーションなどを行う上で、自閉症当事者の支援ニーズを把握し、生涯にわたり一貫してサポートする姿勢が保持されている。また、サービスを提供する専門家向けのトレーニングプログラムの開発に取り組んでおり、故・佐々木正美氏がTEACCHを日本に取り入れて以来、その取組が後継者によって日本でも継続・展開されている。2012年、TEACCHは、ローラ・クリンガー博士をディレクターにTEACCH Autism Program (TEACCH自閉症プログラム) と改称し、新たなコアバリューが示された(表1)。

今日、TEACCHの理論・考え方は世界中に拡がり、Structure TEACCHing (構造化) は、エビデンスベースドプラクティス (EBP) として認証され、自閉症・発達障害児・者の支援の場で導入されている。

4 発達障害支援と専門家養成

我が国における発達障害支援施策は、2007年に発達障害者支援法が制定され、急速にすすめられている。近年は、欧米の先駆的な研究や実践にも影響を受け、TEACCHや応用行動分析学 (Applied Behavior Analysis: ABA)、認知行動療法 (Cognitive behavioral therapy: CBT) など、エビデンスのある支援を積極的に取り入れる必要性が問われているが、自閉症・発達障害支援の現場に広く浸透しているとはいいがたい。

山口県においては、平成28年度から実施している発達障害児地域支援体制強化事業により、身近な地域での発達障害の理解と支援の養成を進めている。

私はこの事業に協力する立場で、山口県健康福祉部障害者支援課職員や山口県発達障害者支援センターのスタッフとともに、支援に携わる者の専門性の向上が必要であることを共有してきた。山口県の特徴としては、各地域の児童発達支援センターが主催し、支援者を養成するための具体的な取組を実施する仕組みをつくっている。これらの経験を通して、発達障害支援の質向上のためには、専門家養成が鍵となると考えている。

発達障害支援分野の専門家養成を考えたときに、医療・福祉・教育・保健等の専門家を対象にした学ぶ場を提供していくことはもちろん必要である。しかし、それに加え、専門家養成に携わる大学等における教育内容の充実、支援の場に従事する専門職としての実践能力の育成に力を入れていれた教育を展開していくことも重要であると考えられる。例えば、本学社会福祉学部におけるソーシャルワーカー養成、特別支援学校教員養成においても、講義・演習・実習などの教育内容の工夫・改善が必要であろう。正課外においても積極的に当事者や支援者と出会い、共に活動する機会を提供し、専門職として主体的に行動できる実践能力を育成することも必要になるだろう。また、本学の地域貢献事業として専門職のキャリアアップを目的とした講座の内容の充実・発展のための検討が必要であると考えている。

5 滞在研修制度を活用して

このような課題を肌で感じつつ、私自身も自閉

表1：TEACCHのコアバリュー

Teaching	我々は、革新的な教育や教授法、および実際のモデルのデモンストレーションを通してASDについての知識をシェアし、他者のスキルレベルを高めていく。
Expanding	我々は、ASDの本人とその家族のために、最も質の高い、確かな根拠に基づいたサービスを提供できるように、自分たちの知識はもちろん、他者の知識を広げることに全力を尽くす。
Appreciating	我々は、ASDの人とその家族を理解し、その真価を認める。
Collaborating & Cooperating	我々は、同僚やASDの本人、そしてその家族、またより大きいコミュニティの人たちと交流する時には、協働と協力の精神を体現していく。
Holistic	我々は、その人の全人格と関連するシステムに、生涯にわたり注目していくことの重要性を強調していく。

2019年度川崎医療福祉大学社会連携センター主催「自閉症特別講座」第1回「TEACCH Autism Program」(講師：川崎医療福祉大学准教授、諏訪利明氏の講義資料より筆者作成)

症・発達障害支援に携わる支援者として成長し、山口県の発達障害支援の質向上を目指した専門家養成に貢献することができればという思いが巡っていた。そこで、本学の滞在研修制度を活用し、「発達障害支援の質向上を目指した専門家養成におけるTEACCH Autism Programの意義と必要性について」をテーマとし、川崎医療福祉大学にて10ヶ月間（令和1年8月～令和2年3月）の研修を行うことになった。

研修の目的として、①TEACCH Autism Programの理念及び最新の知識・技術を学び、自閉症・発達障害の支援技術の向上を図る②川崎医療福祉大学社会連携センター及び同大学大学院医療福祉専攻（TEACCH）コースが企画・運営している研修会に参画し、発達障害支援システムや地域における専門家養成における大学の社会的役割を考察する③川崎医療福祉大学大学院医療福祉専攻（TEACCH）コースを担当する教員、大学院と研究や実践における情報共有や議論を行い、発達障害支援における研究の意義と課題を探究する、を掲げた。

現在、研修途中ではあるが、中間報告として、発達障害支援の質向上を目指した専門家養成における大学の社会的役割について、川崎医療福祉大学TEACCH Autism Programの学びをもとに整理しておきたい。

6 発達障害支援の質向上における大学の社会的役割—川崎TEACCHの取組から—

1) 川崎医療福祉大学TEACCH Autism Program (川崎TEACCH)

2004年4月2日、川崎医療福祉大学はノースカロライナ大学医学部TEACCH部と公式に姉妹大学（Academic Partnership）の提携している。そのきっかけを作ったのが、故・佐々木正美氏である。佐々木正美氏の想いを繋げ、川崎TEACCHは、今日まで、TEACCHの理念と実践を拓げるために、教育研究活動及び地域貢献活動を継続・発展させている。

現在の川崎TEACCHは、TEACCH® 上級コンサルタントである諏訪利明准教授を含め4名の専門家（大学所属教員）が担っている。諏訪氏は、川崎TEACCHのリーダーとして、川崎TEACCHが主催する事業の企画・運営、同大学大学院医療福祉学専攻発達障害（TEACCH）コースの大学院生の指導などを担っている。

2) 川崎TEACCHが展開される「TEACCH活動研究室」

川崎TEACCHの教育研究及び地域貢献活動の拠点となる「TEACCH活動研究室」に入っ

場所に、故・佐々木氏正美がノースカロライナ大学を訪れた際に、研究室に送られてきた絵葉書きが額に飾られている。その文面には、TEACCHを日本に導入された佐々木正美氏の直筆のメッセージが書かれている。その横には、川崎医療福祉大とノースカロライナ大学の提携書が並ぶ。川崎医療福祉大学は、2004年にノースカロライナ大学医学部TEACCH部と学術協力を目的に姉妹大学の提携をしており、それ以来、日本で唯一「TEACCHプログラム」という名称を正式に使用することのできる大学である。絵葉書や提携書に書かれている故・佐々木氏の直筆の文章やサインを見つめると、自閉症の人に対するあたたかく優しいまなざしと、支援者が学ぶ必要があることを提唱していきたい強い思いが伝わってくる。その思いが現在の川崎TEACCHに受け継がれ、スタッフの教育研究活動や地域貢献活動への意欲や向上心につながっているのではないだろうか。

研究室には4名のスタッフのデスク、大学院生や地域の支援者が学ぶための教材として、書籍や文献、演習を行うための教材・教具を作成するための材料や子ども用の課題やおもちゃ、発達検査キットなどが整理されている。20人ほど座れる大きなテーブルでは、専門家養成のための研修企画や院生とスタッフが地域貢献を行う様々な活動の準備、院生への研究指導、地域の支援者とのカンファレンスや相談活動が実施されている。



写真1：地域貢献事業の企画・運営のミーティングを行う川崎TEACCHスタッフ

3) 大学院教育から学ぶ

川崎医療福祉大学大学院医療福祉学専攻では、TEACCHプログラムを学ぶことができる「発達障害（TEACCH）コース」を2007年4月に設置され、自閉症・発達障害者支援に総合的に携わることのできる高度専門職業人・指導者を養成している。このコースでは、TEACCHの理念に基づいた自閉症・発達障害者支援の理論および実践技術習得が可能になっている。学内教授陣に加え、全国各地の

TEACCH実践者の協力の下に、講義・演習・実習が準備されている。教育カリキュラムは、全国で最初の医療福祉大学の特性を活かし、大学院医療福祉学研究科医療福祉学専攻修士課程科目も組み入れている。「自閉症学概論」「自閉症児（者）支援特論」「コミュニケーション研究」「TEACCHプログラム特論」「高機能自閉症研究」等の授業が組み込まれている。また、米国ノースカロライナ州におけるTEACCHセンター等の視察研修の機会も準備されている。

大学院の授業として展開されている演習と実習の一部を紹介したい。大学院2年生の授業「医療福祉学実習」では同大学附属病院リハビリテーション科と連携した実習が展開されている。また、川崎TEACCHと連携している児童発達支援センターにおいて、TEACCHで開発されたアセスメントツールや発達心理検査等を導入し、包括的なアセスメントを経験できる演習（「TEACCHプログラム演習Ⅰ・Ⅱ」）が行われている。院生は、子どものアセスメントの経験だけでなく、評価をもとにした教育支援を行う学修を行っている。また、地域の保健センターでは、乳幼児健診後のフォローアップ教室に院生がスタッフの一員として参画し、子どもの発達支援と母親支援にかかわる経験もできる。

授業は、川崎TEACCHのリーダーである諏訪准教授が中心となり、教員2名が指導補佐として院生の指導にあっている。これらの場面に同席させていただき学んだことは、院生の教育は、TEACCHの理念や実際についての講義に加え、演習・実習を通して、実際に自閉症の子どもや家族、支援者との具体的なかかわりを通して貴重な学びが得られているということである。さらに、諏訪氏の子どもや家族へのかかわりを見聞きする経験は貴重であり、院生の実践力育成につながっていると考える。現在、学んでいる院生はすべて社会人であり、発達障害・自閉症児者への支援に携わっている支援者でもある。すべての院生が現場で発達障害支援の質向上の必要性と自身の能力の向上のために、ここで学ぶことを強く望んだ人ばかりである。志の高い院生の指導にあたる教授陣も院生と共に学びつつ、研究活動に邁進している姿が非常に印象深かった。現在、大学院2年生は修士論文の執筆の仕上げの時期にある。中間発表を拝聴させていただいて感じたことは、研究動機は院生それぞれが支援者として勤務する過程において、発達障害・自閉症支援における課題を明確化した上で、研究を通して新たな方法論や支援論を導きだそうとしている点にあった。

我が国における発達障害支援の推進において、専門家養成は極めて重要な課題として掲げられている。川崎TEACCHの修了生が社会に毎年、輩出さ

れ、研究的視点を有した実践者として活躍していくことで、支援の質向上が期待されると考える。



写真2：「TEACCHプログラム演習Ⅰ・Ⅱ」の授業の様子

4) 川崎TEACCHの地域貢献活動

川崎医療福祉大学社会連携センター主催の地域貢献活動には、川崎TEACCHのスタッフの企画・運営で実施されているものがいくつかある。その中の一つである「自閉症特別講座」は、2002年度に故・佐々木氏の企画で開始され、18年間継続されている。講座は、年25回開催され、TEACCHに関する最先端の研究や実践を学ぶことができる内容になっており、地域の支援者と院生が共に学んでいる。私も、2019年度受講生として参加し、毎週金曜日18時半から2時間、仕事を終えて参加している教育・福祉・医療関係の支援者たちと共に学んでいる。そこで出会った児童発達支援センター保育士は「日々、これでよいのかと思いながら子どもたちにかかわっている中、専門的なことが毎週学ぶことができるので刺激になってる」と話してくれた。このような場が身近にあることは自閉症・発達障害支援に携わる者にとって非常に貴重な場となると考える。その場を継続的に提供し続けている川崎医療福祉大学の取組は、発達障害支援に携わる専門家養成に貢献する取組であると考えられる。この講座以外にも、「自閉症支援現任者レベルアップセミナー」「海外講師招聘講座」「TEACCHトピックセミナー」等が開催され、発達障害支援の質向上に貢献する様々な取組が行われている。これらについてはすべての研修が終了してから別稿にて報告することとする。

5) 川崎TEACCHスタッフによる地域貢献活動

川崎TEACCHのスタッフは、講演会講師、福祉施設や学校へのコンサルテーション、発達障害者支援センター主催のTEACCHトレーニングセミナーの講師等、県内外において専門家養成にかかわる取組を具体的に展開している（写真3）。その取組の中で、私が参加したTEACCHトレーニングセミ

ナーである「TEACCH® Five Day トレーニング」(株：フロム・ア・ヴィレッジ主催、令和元年8月11日～15日開催)には、TEACCH®上級コンサルタントある川崎TEACCHのスタッフ2名(諏訪利明氏、重松孝治氏)がトレーナーとして運営にかかわっていた。この研修会は、ノースカロライナ大学シャーロットTEACCHセンターからセンター長のジョイス・ラム博士が講師となり、自閉症児者と家族の協力を得て、TEACCHの最先端の情報を交えた講義・演習によるトレーニングである。川崎TEACCHスタッフが、研修を運営するトレーナーとして、専門家養成に熱心に貢献される姿が印象的だった。(写真4)



写真3：児童発達支援センターへのコンサルテーションを行う様子



写真4：「TEACCH 5 DAY」にてトレーナーとして受講生への指導の様子

7 おわりに

本稿では、滞在研修先の川崎TEACCHのスタッフの教育研究活動や地域貢献活動の取組から学んできたことを中間報告としてまとめた。

さて、研修期間は残り3か月となった。大きな行事となる「川崎医療福祉大学TEACCHトピックセ

ミナー」「米国ノースカロライナ大学TEACCHセンター視察研修」も控えている。この研修を含め、川崎TEACCHのスタッフである諏訪利明氏、重松孝治氏、下田茜氏、小田桐早苗氏の日々の活動に学んでいきたい。4名のスタッフは、ノースカロライナ大学TEACCH Autism Programの最新の研究や実践を取り入れるために学ぶ姿勢を保持され、自閉症・発達障害支援が抱える課題に目を向けつつ、学生・院生の教育に携わられ、学生たちと共に学び、自閉症・発達障害支援の充実を目指しておられる。研修期間にはスタッフから教育研究や自閉症・発達障害支援についてたくさんのことを教えていただくことができた。この日々の中で、本学に着任してから16年間をふりかえり、今後の教育研究活動や地域貢献活動への取組について考える時間をいただいていることに改めて感謝したい。

残りの研修期間においては、山口県健康福祉部障害支援課、山口県発達障害者支援センターとも連絡を取り合いながら、山口県における発達障害支援の現状と課題を再整理し、専門家養成における教育研究活動、地域貢献活動について、山口県が抱える地域課題解決に向け、大学の役割を整理していきたいと思う。特に、発達障害支援に奮闘している人を支えるための取組としてどんなことができるかについて、具体的に検討していきたい。

地域には、27年前の私のように、支援に奮闘する中で課題を抱え、学ぶ場を求めている人が多く存在しているであろう。大学における専門家養成のための教育内容の充実を図りつつ、卒業生を含め、現場で支援に携わる人が、自閉症・発達障害児者と家族の幸福を探求するために学び、支援者としてのキャリアアップが図れる場を創造していきたい。

【参考文献】

川崎医療福祉大学医療福祉学研究所

ホームページ

http://w.kawasaki-m.ac.jp/dept/graduate_welfare/
(2019年12月20日)

2019年度川崎医療福祉大学大学院要覧、
川崎医療福祉大学発行

【謝 辞】

滞在研修においてご指導いただきました川崎TEACCHの諏訪利明氏、重松孝治氏、下田茜氏、小田桐早苗氏に深く感謝いたします。

また、TEACCHコースの大学院生、川崎TEACCHと連携されている専門機関の支援者の皆様から多くの学びをいただいたことに心より感謝いたします。

